学生と企業のためのダイバーシティシンポジウム

幸せな働き方ってどんなカタチ

就職活動を始める前に先駆的な企業の取り組みを知って、自分にとっての幸せな働き方を考えよう!

2019年
1月23日(水) 12:30〜18:30
イオンモール岡山 1F 未来スクエア

入場無料
会場出入り自由!!

1 トークセッション

出展企業担当者と学生がぶっちゃけトーク!働き方改革への取組や効果について、学生が鋭く迫ります!

2 企業ブース

働き方改革や働きやすい職場環境づくりに積極的に取り組んでいる企業や自治体のブースを自由に回り、取り組みについて話を聞くことができます!

3 ブーススタンプを集めてもらえる 選べる来場特典!

人気カフェチェーン
「500円分のカフェチケット」または
プロカメラマンによる
「証明写真無料撮影」 各先着200名限定

※写真データは後日ダウンロード可能。撮影ご希望の方はスーツやジャケットなどでお越しください。

出展企業・自治体一覧

両備システムズ / MITSUBISHI MOTORS / Katayama / OG Wellness
BANK 株式会社トマト銀行 / TENMAYA / SEEDS 株式会社シーズ / 日本生命 NISSAY / 生活協同組合おかやまコープ
JR西日本 / muRata 岡山村田製作所 / 人と地球のいのちを守る MORITA 株式会社モリタホールディングス / exa EXA CORPORATION / 社会福祉法人 / 岡山県 / 岡山県警察

主催 ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
(国立大学法人岡山大学・一般社団法人岡山経済同友会・岡山県)

後援 岡山県教育委員会・岡山市教育委員会・一般社団法人国立大学協会・岡山県私学協会・岡山県経済団体連絡協議会
岡山労働局・岡山県商工会議所連合会・岡山県経営者協会・岡山県中小企業団体中央会・岡山県商工会連合会

大学生部門

岡山県知事賞

家庭の価値観

山陽学園大学３年　山田　奈々

私の母は、当初はパートタイムだった販売員の仕事に、現在は正社員として勤務している。母が正社員になったのと同じ頃、私達姉妹が高校生になった。そのため、以前のように規則的な帰宅時間とはいかなくなり、家族４人で過ごす時間は劇的に減った。元々、父が朝出社し、夕方に退社するとはいかない勤務体系なのも影響していたと思う。そのせいか、たまに家族全員で過ごす休日は、奇妙なほどくすぐったく思えた。それは、物を言わぬ愛犬でさえも、そう思っていたのではないかと、より軽快な仕草から察せられた。

母は、仕事に加え、独身の頃から嗜んでいた茶道にも精力的に取り組んでいる。それも、趣味の範疇を飛び越え、普及、あるいは慈善活動として、京都や福島県いわき市、そして遠方ではバルセロナにまで活動の範囲を広げている。私は幼い頃から茶道をしている母を間近で見てきたし、一緒に活動させてもらうことも多かったため、母の影響で価値観が陶冶されていった。現在大学で古典文学を専攻しているのも、その影響が少しなりともあるとはいえるのではないだろうか。

しかし、母方の祖父母は昔気質な性格で、母が家庭を空けることに関してかなり善く思っていないようだった。そして、父や私達を心配し、申し訳なく思っているような態度をみせて、「淋しくないか」と問うてきた。それに対して、私は虚勢でもなんでもなく、本心から「淋しくない」と答えていたし、妹も私と答えを同じくしていた。妹も私と同じで、幼いながらに、母として以上に、自分が好きなものに心血を注ぐ一人の人としての魅力を感じていたからなのだろう。

その母を支えているのは、紛れもなく父だといえる。父は、母が度々家を空ける事に関して、不満を抱いているのかもしれないが、決して口外することはない。むしろ、母を応援するように、家事や私達の食事の世話を買って出てくれる。そして、近場だと仕事の合間に母の送迎をしたり、茶会の設営を手伝っていたりすることもある。その両親を見て育ってきたためか、趣味への価値観の相違が離婚の原因になり得る夫婦が多くいる事にとても驚かされた。

その時、母が２日程家を空けると告げた際に、父が快く返事をし、往復の交通手段の心配をしていたことを思い出した。私にとってはありふれた風景だが、良い意味で普通ではないことを悟り、少し誇らしく思えた。

とはいえ、母は家庭を完全に放棄しているわけではない。私達が好き嫌いをしないで育ってこれたのは母の温かい手料理のお陰だし、一緒にオープンキャンパスなどに赴いて、進路に関して考えてくれた。私達がしたいと言ったことも、出来る限り叶えてくれた。それらの母親の役目に加え、仕事や茶道に貢献しているのだから、そのタフさには感服せざるを得ない。そして父も、母に圧倒されることなく、マラソンやトライアスロンという、自分が心から打ち込める趣味を見つけ、自分らしさを追求しているように思う。

1999年に施行された男女共同参画社会基本法の第六条では、男女の協力のもと、家庭の一員としての役割を果たしつつ、その他の活動ができるようにすることが規定されている。すべての家庭が、私の父と母のように、許容しあっていくことは難しいと思う。その時、男女の役割や、祖父母が抱いていたように、「こうあるべき」という固定観念に囚われることなく、価値観を新たに構築できるか、という点が要になってこよう。

私は、父と母から、唯の両親としてではなく、「親としての使命を全うしつつ、より自分らしい生き方を模索する」母親の姿と、「性別による固定観念をもたず、自分らしく妻を支えていく」父親の姿を普通のように思っていた。しかし、今となっては、それは誇るべきことであり、親としてだけではなく、人間として尊敬できるこの両親の下で生まれ、育ってきたことが、それだけでありがたく思えるようになったし、私もこうなっていきたいという指針にもなった。

高校生部門

岡山県知事賞

私の家族

岡山市立岡山後楽館高等学校１年　今門　夢瞳

幼い頃から、働く父や母の姿を見て、この光景が当たり前だと思っていた。昔の日本では「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考え方が主流だったことも最近まで知らなかった。私の母は、毎朝四人の子供を学校へと送り出してから職場に向かう。家に帰ってくるのは、私が学校から帰宅するよりずっと後だ。すぐに夕飯の準備を進めて、掃除、洗濯、次々と家事をこなしていく母を見ていると、働きすぎではないか。と心配する日もあった。「少しは休んでね。」そう声をかけたことも何度かあるが、母は決まって優しく微笑んでいた。

私が小学校四年生の時、弟が体調を崩し、入退院を繰り返した。幼い弟につきっきりだった母は、家にいることがほとんどなくなった。そんな中、忙しい仕事の合間を縫って、料理、洗濯、掃除と、以前までの母の役割だった家事を夜遅くまでしてくれていたのが父だ。その姿を見て、少しでも負担を減らしたいと思い、不器用ながら率先して家事を手伝ったことは今でも覚えている。それまで家事をほとんどしてこなかった私は、掃除機をかけることさえ儘ならなかったが、母は仕事と家庭を両立させ、家事を怠ったことはない。今まで、母が家事をすることが当たり前だった私にとって、この経験は大きな意味があったに違いないだろう。

男女共同参画社会基本法を実現するために「男性も女性もひとりの人間として能力を発揮できる機会を確保する必要がある」「男女が対等な家族の構成員として互いに協力し、社会の支援も受け、家族としての役割を果たす」などが挙げられている。現代社会において、女性に代わって家事をする男性はたくさんいるし、結婚前とかわらず仕事に熱心な女性もたくさんいる。もちろん、家庭によって在り方は様々だ。ただ、私のように、一つのきっかけから、父や母、兄弟や子供、お互いの存在がかけがえのない宝物だと気づく家族が増えてほしいと願う。

私が中学校一年生になった頃、姉と弟に障がいがあることを初めて知らされた。それがどういう意味であるか、幼いながらに理解していた私だが、特に気にすることもなく「そうなんだ。」程度で片付けていた。障がいの有無に関わらず、大切な姉と弟だ。その事実に変わりはない。むしろ気にする方がおかしいとさえ思っていた。しかしある日、偶然姉と弟の障がいに関するたくさんの資料を見つけてしまった。いずれも、私が理解するには難しい文章で綴られていたが、父や母はこの事実と常に向き合っているのだと、実感した瞬間だった。その日から、母の抱えているものが、一層大きく感じた。そんな素振りを一切見せず、常に明るく、普段と変わらない笑顔で私たち兄弟のことを一番に考えてくれる母を、心の底から誇りに思う。

私の将来の夢は、障がいを持った子供たちと関わる、療育施設の保育士になることだ。その夢を目指すきっかけとなったのは、大好きな兄弟の存在や、いつも支えてくれる両親の姿である。この夢を家族に話したことは一度もない。きっと、今の私には無理だと笑われるだろう。いつか母のような、何事にも妥協しない、真っ直ぐに生きる力を身に付けた時、自信を持って話したい。時にはぶつかりあって、「どうして私はこの家に生まれてきたのか」と落ち込んでしまう。しかし、必ず思い起こされるのは、家族六人、みんなが笑って、一つの時間を共有している場面だ。この家に生まれてこなかったら経験できないこともたくさんあっただろうし、この夢を持つこともなかったのだろう。私の人生の中で一番輝いているのは、他の誰とでもない、家族といる時間だ。これだけは譲れない。私の両親は毎日、たくさんの仕事をこなし、たくさんの愛情を注いでくれる。そんな両親が私の永遠の憧れだ。普段は恥ずかしくて言えないけれど、

「パパ、ママ、いつもありがとう。」

大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

共働きを支える秘訣

岡山大学５年　佐々並　三紗

近年、共働きの家庭が増えている。しかし、女性が社会に出やすくなった分、子育てに関する問題は避けられない。共働きの家庭ではどのように子供を育てるのか？子供達は寂しい思いをしないだろうか？愛情は不足しないだろうか？

私の母はまさにそういった問題を経験した子供だったらしい。祖父は公務員、祖母は服の直しを生業としており、母の家庭はその時代には珍しく共働きの家庭だった。祖母は家で作業していたものの、仕事に忙しく子供達のことはほったらかしで母はとても寂しい思いをしたそうだ。一度などは、忙しさに追われる祖母が母の楽しみにしていた子供会のイベントの日を間違え、参加できずに泣きながら家に帰ったこともあるそうだ。そのような思い出や父の希望もあり、母は私が生まれた時、正社員を辞めて専業主婦になることを選んだ。私と弟はのびのびと育てられたが、やがて、私が小学校に上がってしばらくして母は再びパートという形で元の職についた。

そうして私も先に掲げた問題の当該者となった。しかし、私の場合は、父は忙しく働いていたものの母は朝や夕方は家におり、寂しさといったものは全く感じなかった。また、中学校に入ってから2世帯で暮らすようになり、ますます寂しさとは無縁になった。私は、共働きを大変と思ったことは一度もなかったし、寂しさや愛情不足を感じたことも一度もなかった。もはや祖母が忙しすぎて母が寂しさを感じていたなど信じられないくらいだった。一度、仕事に忙しい母は私が林間学校から戻る日を間違え、いつまでたっても迎えに来てくれないことがあった。どこかで聞いたような話だな…と思いつつ、心配してくれた先生に親と連絡が取れたことを告げると「お母さんもあなたに似ているんですねぇ」と言われ、忙しさより血筋を恨んだものである。

共働きで、出産・子育てと仕事を両立するのが難しいことなのだと本当に理解するようになったのは実は最近だ。私は大学5年生になり、ようやく実習という形で目指している医師の職場を目の当たりにした。責任のある仕事に忙しく働く医師たち…。今までも医師の仕事は大変だと聞いていたものの、やはり普通の勤務形態で出産・子育てが不可能なことは一目瞭然だった。しかし、そのような場にもサポートが無いわけではなかった。敷地内に幼稚園があったり、急に発熱した病気でない子供を預かる場所があったり。しかし、それで問題が全て解決するわけではないだろう。私は医師として働き続けたいし、子供を持つとしたら共働きの可能性が高い。将来を考え我が身を案じた時、母のことを思いだした。

「お母さんはね、ほんとは正社員として働き続けたかったんよ。正社員として働いてたら今頃・・・」

母の口癖だ。働きたい気持ちを振りきって私達子供ために正社員を辞めた母。パートを始めても、ご飯を作り、朝は私達を見送り、夜は習い事の送り迎えをしてくれた母。始めは派遣社員のパートから始まった中で、それがどれほど大変だったことか。しかしよく考えると、生活は母のおかげだけで成り立っているわけではなかった。祖母は母の忙しい時などは喜んで料理を作ってくれた。「お母さんは仕事で大変だから、手伝ってあげんとね」と、仕事で忙しかった祖母が今度は仕事で忙しい母を助けていた。祖父も父もよく送り迎えをしてくれたし、家事にも協力的だった。みんなそれぞれ仕事がある中で、私の夢を応援し協力してくれる家族。なるほど寂しさも感じないはず。社会の厳しさを知った今、感謝の気持ちでいっぱいだ。

人は皆忙しい時期が違う。それは一日の中でも、一週間の中でも、月単位、年単位でも同じこと。家庭内で助け合えたら一番いいのだろうが、核家族化が進む中、今はそれも難しいことなのかもしれない。皆がそれぞれの場所で活躍するために、それぞれが助け合い、今後ますます出産・子育てに理解ある社会になることを願っている。

高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

私の宝物

岡山県立岡山城東高等学校１年　海田　千尋

私の家庭は、他の家庭と違うのだと、日常生活でも感じることがよくある。それはきっと、私の家庭が私と姉と父の、いわゆる父子家庭と呼ばれる家族の形だからだろう。片親が珍しくない現代でも、父子家庭、しかも子が娘だと少数派だ。この家族構成となったきっかけは、私が小学校3年生のときに母が亡くなったことだ。

母は、私が幼稚園へ入園する頃には、既に闘病生活を送っていた。しかし、私たち子供に辛そうな素振りを見せることはなく、いつも朝早くから晩遅くまで家事を立派にこなしてくれていた。お遊戯会や発表会、行事があれば、いつもカメラを片手に見に来てくれ、沢山の思い出を丁寧にアルバムに詰めてくれた。入退院を繰り返すようになってからも、退院許可をとってまで、誕生日を祝って、一緒に過ごしてくれた。いつも叱られてばかりだったが、テストで100点をとったとき、ピアノを頑張ったとき、些細なことでも母は褒めてくれた。私は、そんな母が大好きだった。病気は治る、そう信じて疑わなかった私のもとに、その日は突然訪れた。

12月上旬、駆けつけたときには手遅れで、私は母の最期に間に合わなかった。手は既に冷たくなっていたことと、祖母の涙を初めて見たことだけは、よく覚えている。なぜ、母が死ななければならなかったのだろう。なぜ、もっと感謝を伝えていなかったのだろう。後悔と悲しみで、涙が止まらなかった。「お前たちがいたから、ママは頑張って病気と闘ったんだ。5年も頑張れた」そんな言葉を父からかけられ、母親という存在の偉大さと強さを痛感した。

母の死後、私たちの生活は一変した。なんとか日常を取り戻してからも、母は専業主婦だったから、やはり家事には困った。母方も父方も、祖父母どころか親戚はみな県外で、家事の助けを求めるのは難しかった。今でこそ、家事全般を受け持つようになったものの、それこそ小学生のときは、洗濯、料理、買い物、家事という家事は、ほとんど父が担当していた。加えて子供会にも選出された年には、更に忙しくなった。もちろん仕事は今まで通りで、職業上、休日出勤も少なくない。申し訳ない、と思ったのは家族で家事を分担し始めた中学生の頃だっただろうか、しかし申し訳ないの一言で済ますべきではないことだと気づいたのはつい最近だ。

共働き家庭が増えてきている中、未だ女性だけが家事を受け持つ家庭は少なくないだろう。世の中にそのような風潮が残っていることも否定できない。そう、父が行っていたことはつまり、女性の立場なら当たり前と思われがちなことなのだ。家事労働は当たり前だが無償なので、それを当たり前のように受け取ってしまいがちだが、家事をしたらそれがいかに不当な扱いか、よく分かる。一日の自由な時間を割いて、仕事ではなくとも働いている、ということに気づいてほしい。

「男女共同参画社会基本法」というのは男女平等の推進を図るもので、男女共同参画社会、すなわち男性も女性も、意欲に応じて、あらゆる分野で活躍できる社会、の実現を目指している。もし、女性が家事を受け持つのが当たり前ならば、これが叶うだろうか。私には、とてもそうは思えない。家事が仕事の障害になり、働きたくても働けない、今の日本はそんな世の中ではないか。

これを変えるには一人一人が意識を変えることが大切だと思う。今までの常識という名の偏見に縛られない。男女関係なく、互いを認める。対等な立場で繋がる。寄りかかるのではなく、支え合う。活躍できる場を妨害するのではなく、協力する。自分の役割を見つけ、それを果たす。今の当事者だけではない。次の世代、これからの日本を担っていく私たちが、行動しなければならない。

最後に、私をここまで育ててくれた両親に感謝をしたい。

お母さん、お父さん、本当にありがとう。2人のもとに生まれてきた私は、世界一の幸せ者だと思います。家族は、私の宝物です。

大学生部門

岡山大学長賞

おくりもの

岡山大学 2 年　藤本　梨沙子

「コツコツの積み重ねが大事。」これは母がよく口にしていた言葉です。今年の夏に母が亡くなり、私は喪失感から立ち直ることが出来ませんでした。亡くなってからは毎晩、母のことを思い出しては涙が止まらなくなり、なかなか寝付けない日々が続いていました。時間が経ってようやく落ち着きを取り戻しつつある今、心の中にいる母を想いながら生活しています。

私の母は、優しくて、思いやりに溢れた人でした。また、たわいもない話で笑わせてくれて、私の日々の疲れを癒してくれる存在でした。そんな母は、約2年前に、膵臓に異変が見つかり、それからは入退院を繰り返していました。しかし、今年に入ってから病状が悪化し、入院期間が長くなり、外出も難しい状況になってしまいました。父は、ほとんど毎日のように面会に通って母の看病をし、私も大学の授業の空き時間に母に会いに行きました。身体の調子が良い時も悪い時も会いに行くと、母はいつも私の近況を聞いてくれたり、病気が治ったらやりたいことや行きたいところについて話したりしていました。母が最後に外出できたのは、私の成人式の前撮りをした日でした。その日は、主治医の先生から外出許可が降りたため、1日だけでしたが、母は車椅子で来てくれました。その時撮った母との写真は大切な宝物です。母と出かけた最後の思い出だったので、あの日は本当に奇跡だと思いました。

母と過ごした日々を振り返る中で、母が私によく言っていた言葉があります。それが「コツコツの積み重ねが大事。」という言葉です。この言葉には、何か夢や目標を達成するためには日々の積み重ねを大切にしなさいというメッセージが込められています。私が受験生だった時期も、この言葉を信じて自分がやるべきことを丁寧にコツコツ積み重ねて、準備したからこそ合格をつかむことができたのだと痛感しています。母は入院中、精神的にも肉体的にも衰えていく中、自分でできることを増やそうと頑張っていました。辛い時やしんどい時も絶対良くなると信じ続けていました。前向きな姿勢を変わらず保ち続けた母は本当に辛抱強い人だなと思います。そんな母がいたから、私は私らしく強く生きていこうと思えるのです。母に代わる人はいません。私は母から送られた言葉が、自分にとってモットーであり、支えになっています。

父は、仕事を一度定年退職をしていましたが、母が病気で仕事を辞めてしまったため、もう一度仕事に復帰して働いています。母が入院するようになってからは、慣れない家事にも取り組み、仕事と家庭の両立を図っていました。それに加えて、母のところに毎日通っていたため、心身ともに疲労がたまってもおかしくないはずなのですが、父は趣味であったり、友達と会話したりして、自分の時間を設けてストレスを軽減させていました。父は母の分まで元気に生きようと必死だったのだと思います。母が亡くなってからも、一家の大黒柱として全力を尽くし家族を支える父の姿を見て私は感心しました。私も父のようにたくましく生きていきたいです。

私は父と母からたくさんの愛情を受けてきたと感じています。母が書いていた日記には、自分のこと以外に子どもの成長を応援する内容が書かれてありました。私はその日記を読み返すたびに、涙が溢れてきます。母の存在が私の中でどれほど大きなものだったか、亡くなってからより強く感じるようになりました。母からのからのおくりものは言葉だけでなく、相手を思いやる心を持つことだと考えます。実際に、一度どん底に落ちた私を救ってくれたのは、周りにいる大切な人々の存在でした。親身になって支えてくれる人がそばにいてくれるのは、とても有難いことです。その人たちへの思いやりの気持ちを忘れず、今まで関わってきたすべての人に感謝してこれからも前進していきたいです。

高校生部門

岡山大学長賞

母の偉大さ

岡山県立岡山芳泉高等学校２年　三宅　緩奈

私が高校二年生の時の六月に、母が入院することになった。幸いにも重い病気ではなく、一週間程度で退院できるとのことだった。

母が入院している間の家事の分担を決める時、私は「料理をするよ。買物も行く。」と父と妹に言った。父は朝早くから夜遅くまで働いていて、とてもじゃないけど家事を出来る生活ではない。中学生の妹は部活をしていて、帰ったら疲れきっているようで、寝ていることも多い。自分しかできる人はいないという責任感から、料理を担当しようと決意した。

毎日の朝食と夕食作り、自分の昼食用の弁当の用意。土日は妹の弁当も作らなくてはならない。献立をたて、材料を買いに行く。思ったよりもやることが多くて、少し不安になったが、母のことを「大変そうだな」と思ったことは無かったし、自分も上手くこなせるだろうと、根拠のない自信をもっていた。

初日、皆が好きな野菜の肉巻きをつくることにした。部活が終わり、その帰りにスーパーへ寄った。重たいリュックを背負ったまま、見慣れない精肉コーナーを覗いた。豚肉の薄切りのものを手に取るが、何枚あれば足りるのかわからない。味付けは何ですれば良いのだろう。何もかもわからなくて、インターネットで調べながら買い物をしたため、三十分以上かかった。サラダ油を持って帰るのが辛かった。

結局、夕食にありつけた時刻は九時を過ぎていて、料理に一時間以上かかってしまった。おまけに味は薄くて、肉から野菜がはみ出ていた。ご飯もべちゃべちゃで、炊飯器すら上手く使えない自分にショックを受けた。

翌朝五時に起きた。初めての弁当作りだ。妹や父は眠っている中、なんで自分はこんなに頑張らなくてはいけないのか、と急に悲しくなってきて、泣きながら弁当に薄味の肉巻きを詰めた。どう見ても美味しそうではないし、いつもより二時間も早く起きたのに結局ギリギリになってしまった。授業も眠かった。

その日の夜、夕食を作っている時に、妹に洗濯物を取り込むように頼んだ。妹は「嫌だよ。部活で疲れたもん。」とスマホをいじってソファでくつろいでいる。普段なら洗濯物くらい私が取り込むし、母が妹に手伝うように言ってくれるが、睡眠時間が短いストレスもあり、妹に怒鳴ってしまった。「こっちは朝も早いんだから手伝ってよ。バカ。」言いすぎた。妹はふてて部屋にこもってしまった。

どんなに辛くても、忙しくても、家族のご飯を作らないわけにはいかず、一週間耐えた。毎日父も妹も「美味しい」と言ってくれたが、自分の料理に対して抱いていた自信は、もう全くなかった。母が帰ってきて、久々に母の料理を食べた時、泣いてしまいそうになった。

母はいつも、仕事をしながら、料理という手間と時間のかかる大変なことをしていることに、改めて気づかされた。しかも、掃除や洗濯は妹と父がやってくれたが、いつもは母はそれも一人でしている。それに加えて、私のほんの些細な話や、部活や勉強の相談も、一緒に笑ったり悩んだりしながら聞いてくれる。妹もいるから、二倍だ。

私は今までの行いを後悔した。自分の仕事である洗濯物を畳むことだけをして、十分にお手伝いをしている気になっていたからだ。それに、母の仕事の話も、適当に流してしまって、ちゃんと聞いたことはなかった。母の入院中、話を聞いてほしいと思うことがたくさんあった。手伝ってほしいと思う時間もたくさんあった。母だっていつも思っているはずだ。それでも、学校がある私には頼まずに、いつも自分で全部している。私はそんな母の大変さにもっと早く気づくべきだったのだ。

これからは「何か手伝おうか？」と、母に積極的に言いたいと思う。そして、手伝いをしながら母の仕事の話を聞き、母ともっと仲良くなって、母が快適に家事を出来る家を作っていきたい。